

# 思想を善導する環境設計

細野雲外『不滅の墳墓』を読む

土居浩

Environmental Design for Proper Guidance of Thought : Reading Ungai Hosono's *Fumetsu no Fumbo*  
DOI Hiroshi

はじめに

- ① 設計の前提としての社会認識
- ② 環境浄化のための設計  
むすびにかえて

## 【論文要旨】

〈身体と人格〉の視座から細野雲外『不滅の墳墓』（一九三三年刊）を読み直すと、その題目にもかわらず、死者よりもむしろ生者の〈身体と人格〉を対象とする著作であることが判明する。各地の全住民を一墳墓へ合葬する特異な「不滅の墳墓」構想が、同時代的に荒廃の進む墳墓への悲嘆を契機としていることは、これまでも指摘されてきた。たしかに引用された大量の新聞記事が示すように、「不滅の墳墓」では荒廃する墳墓が問題視されている。しかし雲外は「不滅の墳墓」を、姉妹編『思想悪化の因』（一九三〇年刊）・『斯君斯民』（一九三一年刊）を含めた「思想善導研究の三部作」として出版しており、同時代的には「思想善導」の流れにあるものである。

一部の学生や青年団のみならず、国民思想がいかに相互に悪化しているか、その現実が三部作一作目の『思想悪化の因』で示される。主に新聞記事から蒐集した大量の「事実資料」に基づく論述は、三部作に共通する姿勢である。この『思想悪化の因』を承けた二作目・三作目は、雲外自身が「思想善化の因」前・後編として位置付けている。

二作目の『斯君斯民』では、善導教化のため模範とすべき「光明の方面」について「事実資料」が列挙され、いかにすれば効果的に「説法」が可能となるかについて論じられる。この「善」「悪」両方ある「社会環境」を踏まえ、より「善」へと善導教化すべく構想された具体的施策を示すのが、三作目の『不滅の墳墓』である。民衆を「思想善導」するために、より効果的な「説法」の舞台として設計されたのが「不滅の墳墓」構想であり、その意味で『不滅の墳墓』は、死者よりもむしろ生者の〈身体と人格〉を対象としている。

「不滅の墳墓」の具体的像は、「不滅の墳墓」の巻頭に絵画と図面として掲げられている。このうち絵画を担当したのは、売れっ子の挿絵画家・伊藤彦造である。当時「憂国の絵師」として自己主張しつつあった彦造は、まさに適役だったといえるだろう。【キーワード】合葬（共同）墓地、昭和初期、環境設計、思想善導、伊藤彦造

## はじめに

これまでさほどの異和感なく眺めていた対象が、ある概念が提示されたことで、まるで違った様相を示すことがある。国立歴史民俗博物館での共同研究「身体と人格をめぐる言説と実践」(代表・山田慎也)における中心的概念であった「身体と人格」によって示唆されたのは、これまで断片的にしか紹介されてこなかった細野雲外『不滅の墳墓』(細野

一九三二)を、雲外自身の文脈に戻して読み直すことで、議論の拡張可能性が期待されることであつた。とくに人格概念を念頭に『不滅の墳墓』を再読すると、小稿で検討するように、これは死者よりも生者を対象とした「思想善導」策を提唱した書であることが判明する。しかも「不滅の墳墓」を舞台として、そこへ集う生者の身体に働きかけ、人格を陶冶しようとする試みであつた。端的に述べれば、身体への影響により人格の改変を企図する(空間の表象)の一事例として、あるいは、人間主体に影響を及ぼす環境設計の一事例として、位置付けることが可能となつたのである。

ともあれ、まずはこれまでの『不滅の墳墓』への言及を整理しておきたい。

近代墓制史上きわめて興味深い構想を提示する『不滅の墳墓』は、じつに位置付けが困難な本である。拙稿(土居 二〇〇六)では『不滅の墳墓』への言及から始めたものの、本論では扱うことを避けた。別に報告(土居 二〇〇七)した際にも、時代の徒花的な扱いに留めている。それと、このも執筆者の細野雲外が、『不滅の墳墓』を書いたこと以外、ほとんど不明だからである。<sup>(1)</sup>小稿執筆時点においても、雲外について詳細不明であることに変化はない。奥付から判断するに、本名は細野長盛らしいこと、刊行時には西宮市在住だったらしいこと、この二点がうかがえ

るのみである。これまで『不滅の墳墓』については、管見の限りこの二点すら棚上げされて言及されてきた。しかし故意に基礎情報を隠蔽したというよりも、不詳な著者ではあるが内容的に興味深い著作をいかに論及するか思案した結果の、苦肉の策といふべきであろう。

たとえば森謙二は『不滅の墳墓』を紹介する際、あくまで一挿話として扱った。昭和初期における無縁墳墓についての先行研究を紹介した際、「話は横道にそれるが」と断りを入れた上で『不滅の墳墓』へ言及し、次のように述べる。

この著者である細野雲外がどのような人物であつたか私は知らないが、彼の主張は、人々を「一切平等同一墓域同一墓穴に合葬し」、無縁にはならない「永久不滅の墳墓」を建設しようというものである。／細野は、昨日の有縁は今日の無縁であり、今日の有縁は明日の無縁であると指摘している。東京の都市化の中で無縁になつていく墳墓を彼がどのように認識していたかはわからないが、この時代に無縁墳墓についての関心が高まってきたことは事実であろう。(森 一九九三:二三三)

雲外が『不滅の墳墓』で示した構想を、「墓地計画の思想」の系譜に位置付けたのは、橋爪紳也である。日本における墓地と都市との関係を概観した論考(橋爪 二〇〇八)の「不滅の都市墓」章が、丸々『不滅の墳墓』の内容紹介に当てられている。さらにこの論考末尾の「墓地計画の思想」章でも、論考全体を整理する中で『不滅の墳墓』が論及され、雲外の構想が墓地計画史上に位置付けられている。

どうやら巷に流布している墓地計画の思想は、大きなふたつの潮流のうえに整理することができそうだ。ひとつは墓地の不滅性を論ず

るモニュメンタルな「都市墓」をつくり、そこにおおくの魂をまつろうとする思想。もうひとつはリサイクルを前提とする「無限墓地」の考え方である。細野雲外の「不滅の墳墓」プロジェクトが前者の典型であり、死体捨て場に起因する共同墓地が後者の例であろう。

〔橋爪 二〇〇八・六五〕

橋爪によれば、「墓地計画の思想」は、「都市墓」と「無限墓地」との「大きなふたつの潮流」に整理される。このうち「都市墓」の「典型」が、雲外の構想した『不滅の墳墓』なのである。橋爪にとって『不滅の墳墓』は、単なる一挿話でないことが了解されるだろう。

そもそも『不滅の墳墓』が研究者に知られるようになったのは、芳賀登『葬儀の歴史』（芳賀 一九七二）<sup>2)</sup>で取り上げられたことが契機だと思われる。芳賀が『不滅の墳墓』に言及する箇所の小見出しは「現代の墳墓研究の好著」となっている。「葬儀についての先覚的研究」（森 一九九三・二六五）と評される『葬儀の歴史』は、とりあえず一冊で通史を瞥見できる葬送墓制史研究書として時代的に先駆しており、後続の葬送墓制史研究者に対し、『不滅の墳墓』の存在を知らしめたこととと思われる。とはいえ『不滅の墳墓』の位置付けにおいては、芳賀（芳賀 一九七二）と、森（森 一九九三）・橋爪（橋爪 二〇〇八）との間に断絶が認められる。『不滅の墳墓』を「現代墳墓研究の好著」とする芳賀に対し、森と橋爪はある時代の産物として位置付けている。森は、先の引用にあるように、無縁墳墓について関心の高まる時代背景をみてとっている。橋爪は、雲外の構想を「奇想天外なもの」「いささかうさんくさいもの」と評しつつも、「時代の風潮を映した興味深い提案であることは確かである」（橋爪 二〇〇八・六二）とする。また「不滅の墳墓」構想に夜間飛行場が含まれる点に注目した別の論考では、「航空機の急速な進歩に誰もが注目し、また電気の供給増加によって夜間照明の進歩が都市の夜

景を改めた時期だからこそ、二四時間空港と巨大な墓を融合させる奇想が生まれたのだ」（橋爪 二〇〇四・二七）と結論する。

小稿も『不滅の墳墓』を、先行する橋爪や森と同じく、その同時代の文脈に位置付けるものであるが、拙稿（土居 二〇〇六・二〇〇七）を含めた先行する『不滅の墳墓』言及者たちと異なり、雲外による『不滅の墳墓』以外の著作を参照する。いわば『不滅の墳墓』を雲外自身の文脈に戻す試みである。以下、著作の刊行順に検討しよう。

### ① 設計の前提としての社会認識―『不滅の墳墓』姉妹編の構想

この節では『不滅の墳墓』の姉妹編とされる二著を検討するが、まずは雲外の三部作について、基本情報を確認しておきたい。それぞれの奥付によれば、『思想悪化の因』の発行が昭和五年四月十日、『斯君斯民』が昭和六年十月十日、『不滅の墳墓』が昭和七年二月二十五日となっている。これに続く『権金即魔』（昭和八年七月十日発行）の巻末広告では、この三冊が「思想善導研究の三部作」として紹介されている。『不滅の墳墓』が「主篇」、他の二冊が「姉妹編」とされ、定価は三冊ともに「三圓八十銭」、発行所が「雲外書房」、発売所が「巖松堂」となっている。その紹介文は、そのままそれぞれの要約となっているので、書誌情報とともに列挙しておく。

「社会悪の認識と警戒改革の指導を説く 特に青年警察官教育家一般青壮年に送る社会常識涵養の活教科書」（『思想悪化の因』菊版装表六九四頁写真諷刺画多数入）

「社会善の認識と模倣実践の指導を説き、世界に冠絶する我国の皇室と国民の精華を掲げて特に教育家、指導者、青少年、学生に送る思想善導の活教科書」（『斯君斯民』菊版装表上製八九四頁アート刷

写真五頁入)

「思想悪化の因の根本的匡治策 世界人類に叫ぶ千古不磨の法則」  
〔不滅の墳墓〕 菊版美装上製五〇〇頁アート刷写真設計図入)

これは三部作の完結以降の紹介文である。一方、第一作目となる『思想悪化の因』では、その緒言ですでに「永久有縁不滅の墳墓」構想が提示されている。

著者の見解にして大過なくば、その永久不滅有縁の墳墓の前に立ちて法を説くとき、更にその法の功德を、如実に立証するに足る幾多の社会施設を創設して、着々民衆の利恵を増進するとき、始めて一般民衆の痛切なる感激を喚起することが出来得るであらう。そして民衆自ら思想善導運動に参加し、民衆自ら環境の浄化に努力するに至るであらう。然らばその永久不滅有縁の墳墓とは如何、その創設すべき社会組織とは如何、そは次篇の説法論にて縷述釈明し、大方の批判に翹へんとするものである。(細野 一九三〇 緒言：七)

ここで予告されている「次篇の説法論」とは、続く『斯君斯民』のところに序論「説法の要諦」であり、『不滅の墳墓』で具体的に示された構想である。また『斯君斯民』『不滅の墳墓』ともに緒言を、それぞれの書名が当初案を短縮していることから書き起こし、『思想悪化の因』に呼応することを確認している。曰く、本来なら『思想善化の因』『前編』『斯君斯民』『思想善化の因』『後編』『不滅の墳墓』と命名されるべきところが、書名として冗長であるため短縮してあるが、これは『思想悪化の因』の姉妹編である、と。

先の引用に続いて雲外はいう。国民思想は社会環境に因って悪化するが、悪化の防止と浄化を担うのもまた社会環境なのである。まずは『思

想悪化の因』で「国民の思想を悪化する社会環境意識」を一般民衆に知らしめ、続いて「よき反面の社会環境を説いて、その浄化善導の目的を達成すべき」であらう。このように述べる雲外は、自らの言に従って三部作を刊行することになる。まず雲外が国民に突きつけたのは、悪化する国民思想の現実であった。

### 1-1 『思想悪化の因』—社会悪の認識

三部作一作目となる『思想悪化の因』が説くのは、国民思想がいかに悪化しているか、さらには相互に悪影響を与えているか、その現実である。雲外は指摘する。「一般民衆」は、悪いと承知の上で、なおその悪事を平気で敢行してしまう。そんな「悪い方の社会環境」に直面している現在を、いったいどれだけの国民が意識しているだろうか。このような無知な状態を放置したままに「社会改造」「思想善導」をいくら唱えても、それは「空論」にしかならない。まずは「一般民衆」に「悪い方の社会環境」に取り巻かれていく「世間の実相」を知らしめる必要があるのだ。

『思想悪化の因』に始まる雲外の著作が、おびただしい分量の新聞の引用で埋め尽くされているのは、じつにここに理由がある。一般民衆に世間の実相を知らしめる最適な資料、それが新聞記事である。もちろん新聞記事そのものは「玉石混淆の資料」であることを、雲外自身も承知している。新聞記事を「蒐集、編纂、批判」した上で一般民衆に提供し、「民衆の注意と感激を招来」することが肝要である。それは「民衆と共に」社会改造や思想善導を推し進める前段階として、取り組まねばならない重大事である。ちなみに引用された「大正十五年末以降我国に於ける三十有五種の主要新聞紙の記事」に所載新聞紙名とその日付が明記されているのは、「読者が引証の便に役立つ」(凡例)ためを考えてのことである。この点も「民衆と共に」の意識が反映しているものと思われる。

以上のあらましを述べた『思想悪化の因』緒言に続く序説「読者の誤解を恐れて」も、すでに三部作全体が構想されていたことを傍証する内容である。序説冒頭「一、新聞の社会記事と世間」では、緒言に続き資料としての新聞記事の信憑度についてさらに考察が加えられる。続く「二、日本人の伝統的人類愛」は、本書が示す暗黒面をもって現在の日本の全てだと即断しないよう注意をうながし、別に『斯君斯民』の題目で光明の側面を示すことを予告し、そのごく一部を紹介している。そして「三、超政治的思想善導機関を創設せよ」では、国民思想の統一が困難な理由を歴史に求め、問題の根幹は「因習の久しき我等の旧思想」すなわち「二千数百年來培はれ、育まれ、深刻化された我國民獨特の一特異性である所の忌はしき排他利己主義的習性」であるとす。ゆえに教室で行われる「教育」のとき「尋常一様的手段では、容易に矯正改善することは不可能」であるから、「現在、主として國民の智能啓発を掌る文部省に対して、國民思想の統一、善導を掌る超政治的新行政機関の創設とその有効堅実なる運行を希望するものである」と意見表明がなされる。その具体案は、三部作の最後を飾る『不滅の墳墓』末尾に「附録」として書かれた「超政治的國民指導機関の提唱」が示している。卑俗な表現をすれば、雲外は三部作を通して、拡げた風呂敷をきちんと畳んでいるのである。

『思想悪化の因』本編は「教育界の実相／宗教界の実相／社会環境」の三篇構成となっている。「社会環境」とは別に、「教育界」「宗教界」を独立の一篇としているのは、この「二機関」が「一般國民思想の指導を掌るもの」だからである。とはいえここで雲外が列挙するのは、現状の教育界・宗教界がどれほど頼りにならないかを示す新聞記事であり、第一・二篇だけで本編頁数全体の約1/4を占めている。続く第三篇「社会環境」では、蒐集された新聞記事が十六種に分類・列挙される。すなわち「暴利／欺瞞／風壊／誘惑／誘拐／情実／役得／党禍／金禍／瞞奪

／劣争／不謹慎／左傾／赤化／右傾／直訴」である。『思想悪化の因』では、教育・宗教を加え「十有八種の小社会環境模様」を析出し、徹底的に「國民の思想を悪化する社会環境」が提示されるのだ。ここで雲外が「左傾」「赤化」のみを問題視しているわけでない点、特に留意しておきたい。<sup>3)</sup>これだけ全国民を取り巻く社会環境においては、一部の学生や青年団を対象に思想善導を試みても、それは効果的でなくむしろ不可能である、と雲外は認識しているのである。その点、同時代の思想善導論と一線を画しているといえよう。

『思想悪化の因』末尾の「社会環境批判の終辞」章における総括で、雲外は「思想悪化の真因」を、雲外命名するところの「ヨロシクヤラウと云う心」に求めている。「戦へば手段を選ばず唯勝つた方が善い、自己の栄達利得の爲めには、他人を殺傷することも、尚ほ且つ厭はない」という「非共存、非共栄主義の権化」であり、具体例のひとつとして「選挙時における選挙権の売買その他の選挙違反行為」が挙げられる。また「封建時代の遺物」である「城趾や天守閣」は、「その昔暴逆無道にして自己の爲めに専横と暴力とを以て、我等の祖先を虐げた暴君」の「ヨロシクヤラウと云う心」の権化・象徴である。このようなわれわれの「特異性」は、習慣や歴史の中に積み重ねられてきたのだから、「その根強さは到底十年や二十年の短日月で矯正絶滅し得るものではない」のであり、従来の思想善導論・社会改良論のとき「只口頭や文書の絶叫、宣伝一天張りでは、到底その目的を達成すること不可能」であることは明白であるのだ。

とはいえ雲外の本意は、社会環境によって悪化する現実を前に、絶望を叫ぶことではない。たしかに『思想悪化の因』では、ひたすらに社会悪が説かれている。しかしその最末尾には、じつに「社会環境の浄化に、社会環境を以てせよ」との小見出しが示されているのである。本文では「最後に國民思想が社会環境に因つて悪化されるならば又社会環境に因

て浄化すべきである」と述べ、雲外はまさに環境設計を提唱しているのである。社会環境は悪そのものではなく、善なる部分もある。社会の暗黒面を世に問うた雲外は、筆を新たににして、社会善の実相を世に示すことになる。

## 1-2 『斯君斯民』—社会善の認識

三部作二作目となる『斯君斯民』は、その緒言で『思想悪化の因』の姉妹編であることが明言されている。『思想悪化の因』が「社会環境の暗黒面の現実相を網羅編纂」したものであるのに対し、『斯君斯民』は「光明の方面」つまり「社会環境の光輝燦然たる種々相を網羅編纂」したものである。『思想悪化の因』が示したのは、思想善導は一部の学生や青年団のみを対象にしても不可能であるほどに、全民衆を取り巻く社会環境の悪化であった。とはいえ全民衆を対象とした善導教化とは、どのように着手すればよいのか。それに応えるのが『斯君斯民』『不滅の墳墓』で示される「思想善化の因」なのである。

その緒言で「善良なる精神思想」が「善良なる行為から受くる感激と、その自らなる共鳴に拠つて」こそ育まれることを指摘する雲外は、まず「社会民衆の直面する環境に実在する無限の生ける美事善行」を蒐集し民衆に示すことで、民衆に「感激」と「共鳴」を喚起させることが肝要だと主張する。その具体的成果が『斯君斯民』の本編であり、一作目に引き続き、膨大な新聞記事の列挙がなされる。以下、雲外が想定した「善」をうかがうことにしよう。

『斯君斯民』の口絵に皇室関係の写真を用い、「聖上陛下の日々の御行状は、実に国民教化の生ける貴き儀範であらせらるる」（緒言）と述べられるように、雲外にとって目指すべき「善」の体現者は、誰よりも天皇である。本編では「斯君篇」が「明治大帝／大正天皇／昭和の皇太后陛下／昭和の今上陛下」と章立てされ、さらに「昭和の今上陛下」章は「御

繁激に渡らせられる御政務の御親裁／広大無辺の御顕徳／帝の御日常生活／民情御親閲と国民の感激／科学者としての帝／孝子としての帝／最近時に於ける御下賜金その他／その他の御事ども／昭和の皇后宮の御徳」に分類されていることから、まさに「日々の御行状」そのものを範とする姿勢がうかがえる。とはいえ「斯君篇」の五倍以上の紙幅を費やして「斯民篇」が書かれていることが、雲外の著作を興味深いものにしていく。

「斯民篇」では「男子の部／女子の部／男女協同の部／雑」と章立てされている。このうち「男子の部／女子の部」だけで本書の大半を占めている。以下に列挙し、雲外が想定した（あるいは、雲外が引用参照した新聞記事が示した）当時の民衆における「善」の具体相を瞥見したい。

### 第一章 男子の部

#### 第一節 幼少年

- 第一 額に汗して得た金で他人に同情を寄するもの
- 第二 交通の危急を救ふもの
- 第三 溺れる友を救はんとして死んだもの
- 第四 溺れる人を救つたもの
- 第五 溺れる友を救はんとしたもの
- 第六 友の危急を救つたもの
- 第七 国難に赴く軍人とその家族に寄する至情
- 第八 警察官に感謝するもの
- 第九 麗はしい隣人愛
- 第十 真に尊い同情
- 第十一 勇敢に気転をきかすもの
- 第十二 貧者に寄する愛
- 第十三 正直な貧家の子

第二節

第十四 孝子  
青壯年 男子の部

- 第一 殉職
- 第二 責任に死するもの
- 第三 克く職分を守るもの
- 第四 貴き人類愛に生きるもの
- 第五 社会奉仕に生きるもの
- 第六 郷土の為に尽すもの
- 第七 育英と思想善導に尽すもの
- 第八 仇に恩情を寄するもの
- 第九 奇特な家主と店子
- 第十 御国に奉公を励ます父とその子
- 第十一 奉公至上の模範軍人
- 第十二 軍人の清く熱き同情
- 第十三 戦友美談
- 第十四 入営中己が家に尽すもの
- 第十五 国難に赴く軍人とその家族に寄する至情
- 第十六 警察官の美はしい同情
- 第十七 警察官に感謝するもの
- 第十八 人の危難を救つたもの
- 第十九 路傍の貧旅人に寄する愛
- 第二十 麗はしい隣人愛
- 第二十一 他人の生活苦に寄する同情
- 第二十二 貧者同士の共存共栄
- 第二十三 貧者に寄する色々の同情
- 第二十四 旧恩を忘れぬもの
- 第二十五 孝行

第三節

老人の部

- 第一 人命救助
- 第二 社会奉仕に捧げるもの
- 第三 育英と思想善導に尽すもの
- 第四 郷土の為に尽すもの
- 第五 職分に精励するもの
- 第六 御国へ奉公を励ます父
- 第七 桑の弓を引くもの
- 第八 警察官へ感謝するもの
- 第九 貧者に寄する麗はしい同情
- 第十 主家に奉公を励むもの
- 第十一 旧恩を忘れぬもの
- 第十二 貴き親の情
- 第十三 孝子

第二章

女子の部

第一節 幼少年

- 第一 自力で同情を寄するもの
  - 第二 人を助けんとして溺死したもの
  - 第三 溺れる者を救助したもの
  - 第四 他人の危急を救つたもの
  - 第五 世の貧者に寄する愛
  - 第六 奉公の軍人に寄する少女の純情
  - 第七 警察官へ感謝するもの
  - 第八 旧恩を忘れぬもの
  - 第九 貧家の級友に寄する友情
  - 第十 孝子
- 第二節 青壯年

- 第一 貴き人類愛に奉仕するもの
  - 第二 殉難者
  - 第三 社会奉仕に尽すもの
  - 第四 育英思想善導に尽すもの
  - 第五 人の危難を救つたもの
  - 第六 行路病者に寄する愛
  - 第七 麗はしい隣人愛
  - 第八 貧者に寄する愛
  - 第九 克く職分を守るもの
  - 第十 愛に生きるもの
  - 第十一 売笑の婦にもこの純情
  - 第十二 奉公の軍人に注ぐ至情
  - 第十三 旧恩を忘れぬもの
  - 第十四 受けた世間の情けを忘れぬもの
  - 第十五 節婦
  - 第十六 貧家を背負つて奮闘するもの
  - 第十七 孝子
- 題三節 老年
- 第一 人類愛に捧げる心
  - 第二 社会奉仕にいそしむもの
  - 第三 郷土の為に尽すもの
  - 第四 育英と思想善導に尽すもの
  - 第五 国家に奉公を励ます母
  - 第六 貧者へ寄する愛
  - 第七 国難に赴く軍人とその遺族に寄する至情
  - 第八 旧恩を忘れぬもの
  - 第九 主家に奉公を励むもの

第十 節婦  
第十一 友に寄する愛  
第十二 孝子

ここで性別のみならず年齢によっても分類されているのは、『斯君斯民』の序論「説法の要諦」で示された論法に基づいている。遡ってこの点を確認しておきたい。

『斯君斯民』の序論は「説法の要諦」と題し、国民思想を善導し社会環境を浄化するための「説法」に必要な四条件として「人、法、時、処」を挙げ、それぞれにつき説いている。先述したように、緒論において、民衆に「感激」「共鳴」を喚起させることが善導教化には肝要だと主張する雲外は、序論でそれを「感激第一主義」と呼ぶ。およそ人間は誰でも他人の教えを欲して止まない状況が、一生涯のうちに幾度か到来する。そこに付け入れられて「迷信」や「淫祀邪教」に惑う人々が「昭和の御代にも存在する」が、逆に「一大感激」を受けたことで「今日からは打つて変つた善人」となり「善行を積み社会奉仕に終生献身するものがある」こともまた存在する。つまり百編の説法も、ただ一回の「感激」に匹敵するものではないのだ。つまり思想の善導教化は、いわばこの「感激第一主義」に基づかなければならない。では一体どのような方法で取り組まれるべきか。そのための「説法の四法」が「法を説くに人／法／時／処を得る」ことである。この「時」と「処」はもちろん時機と場所であり、「人」とは善導教化を説く人物の適不適であり、「法」とは思想善導の伝達方法である。この「法」において雲外は「社会指導とその教材の選択標準」として次の三点を挙げている。

(1) 過去、現在、未来を通じて不滅の性質を有し、且つ永久全民衆に抛て守護され、絶対不可侵の信仰と尊崇の対象となり得るもの。



(2) 直面する社会環境の中に生動する事実。

(3) 比較的新しき過去の事実中民衆の記憶なほ新たなもの。

これら「資料教材の活用方針」としては、主として男子を説くには男子の、女子を説くには女子の「事実資料」を用いるように、「幼年／青壮年／老年者」の年齢別、また「官公吏／軍人／学生生徒／餅屋／理髪師」などの職業別、「社会奉仕／人類愛／犠牲的行為／殉職／孝子／節婦／正直」などの行為別の、それぞれ「適合の事実資料」を活用すること、この教材とすべき「事実資料」はなるべく手近に求めること、さらには「法を説く者」の「態度」や「修養」などが提言されている。なお雲外は「社会万般の事柄に關し、その指導教材資料として、有力な新聞紙記事程重要性を帯ぶるものは他にあるまい」として、最近の新聞研究動向について新聞記事を引用し特記している。

さて雲外が「教材」の筆頭に掲げた「過去、現在、未来を通じて不滅の性質を有し、且つ永久全民衆に拠て守護され、絶対不可侵の信仰と尊崇の対象となり得るもの」とは、もちろん雲外が提唱する「不滅の墳墓」にはかならない。なぜなら真剣に教えを求めようとするのは、自己または肉親の死に關係する事態に遭遇した時機に匹敵することはないからである。以上をまとめて雲外は次のように述べる。

自ら法を求むる道心の揺ぐ秋大自然の満目荒涼の秋に於て、一切衆生の各自に縁りある墳墓に彼等を招集し、上来説き来つた説法の四法に則り、道心の教化、思想の善導を説くことは、人に法を説く最良の適策であると断ずるものである。〔細野 一九三一 序論・四五〕

ここで法を説くべき場所である「墳墓」とは、従来から存在する寺院境内や山上・路畔の墓域ではなく、『思想悪化の因』緒言にて読者に約束した「永久有縁不滅の墳墓」のことである。続く第三作目において、

遂に「不滅の墳墓」の具体像が読者に明らかにされることになる。

## ② 環境浄化のための設計——『不滅の墳墓』の構想

『不滅の墳墓』は全五章で構成されており、緒言・序説・結言を除く各章は「陵墓と古墳／民衆の墳墓／火葬場／不滅の墳墓／不滅の墳墓」の結言となつてゐる。皇室関係も取り上げている点、ただし分量は「民衆」関連に圧倒的紙幅を割いている点、ともに前著となる『斯君斯民』と同様である。そのため「不滅の墳墓」には、これまで『不滅の墳墓』言及者たちが触れなかつた「陵墓と古墳」についても、新聞記事を主とする「事実資料」に基づく現状認識と、それを踏まえた提案が示されている。とはいえ分量的にも内容的にも、「民衆の墳墓」の現状認識およびそれを踏まえた「民衆」の「不滅の墳墓」についての構想こそ、雲外が渾身の力を込めたものである。何より読者がまず目にするであろう『不滅の墳墓』の口絵が全て「民衆の墳墓」としての「不滅の墳墓」を示すものであり、口絵では「陵墓と古墳」について全く言及されないことは、じつに象徴的である。その意味では、これまで『不滅の墳墓』言及者たちが、雲外の「不滅の墳墓」構想のうちほぼ「民衆の墳墓」のみに言及してきたのは、「不滅の墳墓」構想の要点を押さえていたともいえよう。小稿でもその立場に基づき、とくに言及しない限り「不滅の墳墓」のうち「民衆の墳墓」について述べる。

以上を踏まえこの節では、「不滅の墳墓」構想の特徴と、その集約である口絵に注目し、検討する。

### 2-1-1 特徴と使命と

ここでは「不滅の墳墓」構想における「五大特徴」「四大別」「三種相」および「三大重要使命」について概観する。本文ではこの順で掲載され

るが、論述の都合上、ここでは「三種相」「四大別」「五大特徴」そして「三大重要使命」の順に確認しよう。

「三種相」(第四章第二節第二款第四(一)「民衆の墳墓の三種相」)は、立地する地勢による区別である。「平坦地方」「山間・谿谷地方」「海岸・湖岸及島嶼地方」に大別される。「平坦地方」「山間・谿谷地方」では主要道路沿い、「海岸・湖岸及島嶼地方」では関係集落中央など、いずれも民衆が集合離散しやすい場所を選ぶように指示されている。なお「海岸・湖岸及島嶼地方」は「夜間灯台を兼ねる」のが特徴である。

「四大別」(第四章第二節第二款「民衆の墳墓の四大別」)は、「不滅の墳墓」へ納められる死者たちの区別である。「国土の墳墓／郷士の墳墓／殉職者の墳墓／民衆の墳墓」と区別されるが、「国土の墳墓／郷士の墳墓／殉職者の墳墓」は、広義の「民衆の墳墓」地内に設立する。「国土の墳墓」は、首都の「民衆の墳墓」地内に設立し、国家管理のもと国民全体によって守護される。「郷士の墳墓」および「殉職者の墳墓」は、各道府県の主都の「民衆の墳墓」地内に設立し、各道府県管理のもと各道府県民によって守護される。「民衆の墳墓」は各市町村に設立し、各市町村の管理のもと各市町村の全民衆によって守護される。補足すると、首都および主都にも「民衆の墳墓」は存在し、そこにはその首都および主都の死者が納められることになる。

「五大特徴」(第四章第二節第一款「民衆の墳墓とその五大特徴」)では、墳墓の外観・墓地境内の施設から、提供されるべきサービスや運営母体までを含めた、いかなれば「不滅の墳墓」の構想全体が提示される。「墳墓の外見的特徴／納骨塔と宗教会館／納骨／祭祀／墳墓の管理と守護」の五点について、順に確認しよう。

第一点は、墳墓の外見である。「不滅の墳墓」は、墳墓そのものが共存共栄を象徴し、なおかつ明るく、広く、清浄であるとの印象を与えるものでなければならない。たとえば具体的配慮として、以下の三点が挙

げられる。植樹立石は絶対に避け、自然の陽光を遮ることなくするのみならず、必要に応じて夜間も非常に明るく照らし出せる照明を設備すること。同時に多数が墓前へ参集し、祭祀だけでなく運動もするのに十分な広さを有すること。自ら敬虔の念を抱かせるものであること。以上を含んだ「墳墓の外見的特徴」は、後述するように口絵で確認できる。

第二点は、墳墓地域内に設立されるべき施設である。ひとつは、関係する地方民衆の「白骨」(胴骨も含めた遺骨全体)を永久に収蔵し回向する「納骨塔」である。もうひとつは、宗教会館では、一定期間「白骨」を預かりその葬祭を担い、かつ民衆への教化と墓域内での保健運動等を司る「宗教会館」である。両施設ともに、第一点の特徴と同様、口絵に反映されている(後述)。

第三点は、納骨方法である。死者の「白骨」は、一時「宗教会館」内の「預骨堂」に納め、春秋の二回、「預骨堂」から「納骨塔」へと移し納める。「納骨塔」へ移す際には、容器から「白骨」を取り出し「無差別平等」に収納する。

第四点は、「預骨堂」および「納骨塔」前での祭祀である。「預骨堂」前では毎日定時(おそらくは朝夕)および預骨時に執行される。「納骨塔」前では、まず「納骨塔」から移し納める春秋の年二回に、当該期の預骨関係者によって執行される。また年一回秋冬の間に制定されるべき「祭祀節」に、全国民にて執行される。このうち「預骨堂」前での祭祀については、口絵に反映されている(後述)。

第五点は、墳墓の管理母体である。先に「四大別」で示されたように、基本は地方自治体である。施設だけでなく、第四点に挙げた祭祀に不可欠の僧侶たちの生活保障もこの自治体の負担とする。

以上の「五大特徴」を備えた「不滅の墳墓」に要請されるのが、「三大重要使命」(第四章第二節第二款第五「民衆の墳墓とその三大重要使命」)である。すなわち「墳墓は公私一切の儀式式場、伝統的共楽の舞

踏場たること」「墳墓は体育と精神教化の道場たること」「大都市の墳墓は航空機の昼夜間離着陸場たること」の三点である。

これら「不滅の墳墓」構想の要点となる特徴と使命とを、読者に印象的に示すのがその口絵である。すでに橋爪〔橋爪 二〇〇二・二〇〇四・二〇〇八〕<sup>4)</sup>によって口絵のうち絵画の一部が紹介されているが、ここでは絵画の全部を検討したい。

## 2-1-2 想像と理想と

『不滅の墳墓』は、緒言の前に口絵を配している。絵画が四枚、写真が二枚、そして折込で図面が四枚と続き、ようやく緒言となる構成となっている。つまり読者は、最初に画像として雲外の構想へ対面するのである。口絵のうちこの節では四枚の絵画に注目する。論述の都合上、順に仮番号を付しておく。

図1 平坦地方に設立さるべき不滅の墳墓〔祖先の祭祀に参詣の民衆感激にひたる〕(理想案)

図2 大都市に於ける不滅の墳墓〔昼夜間航空機離着陸場を兼ね〕暗夜着陸直前の飛行機(想像図)

図3 宗教会館内預骨堂を廻りて朝夕行はるゝ儀式並に預骨のため来館せる民衆の感激(想像図)

図4 〔上〕海湖岸島嶼地方の不滅の墳墓〔下〕山岳谿谷地方の不滅の墳墓(理想案)

少々気になるのは「理想案」と「想像図」が区別されているようなのだが、その基準はよく分からない。いずれにせよこれら図1から図4全てに共通するのは、それぞれ丸々一頁を占め、図の左には概要を示す一文と「細野雲外創案」の文字が、右下には本文参照頁が示されることで

ある。以下、各図右下で指示される頁を参照しつつ、それぞれの画面を眺めることにしたい。

図1では、「共存」の文字が彫り込まれた半球形の納骨塔へ向かって、群衆が押し寄せている。先述した「五大特徴」の第一点、外見が「共存共栄」を象徴しているそのものの図である。群衆の中から伸びる二本の旗は、団体参拝を意味しているのであろうか。納骨塔上空に浮かぶ気球からは、「祖先の眠るところ聽て我らも」「社会奉仕即共存共栄／共存共栄即忠君愛国」の字幕が垂れ下がる。これは、日曜日や儀式日に集まる「民衆の精神行動を浄化善導する」ためである。気球に取り付けられた「ラウドスピーカー」から「地上の大衆」とくに「若き民衆」へ向かって、「力強く呼びかくる声」のみならず「軽快にして勇壮なる音楽のリズム」が送られる。そうすれば「墳墓即樂園、従来行く処を得なかつた若き民衆等は、日曜を俟つて墳墓に押しかけ、散歩に運動に一日を愉快にエンジョイするに至るであらう。そして自然の中、彼等の精神に共存共栄の欲求が芽生え、自ら協同努力するやう習慣付けられる」という目論見である。あるいは、墳墓を清掃するため学生青年団が協同奉仕作業をするならば、それを通して「公德心が涵養」され、若者たちは知らず知らず共存共栄運動に参加することになるのだ。先述した「三大重要使命」のひとつ「墳墓は体育と精神教化の道場たること」が反映していることが了解できよう。

図2には、今まさに夜の飛行場へ着陸しようとするプロペラ機が描かれる。「三大重要使命」のひとつ「大都市の墳墓は航空機の昼夜間離着陸場たること」の具体像である。暗闇を射貫くサーチサイトは、その敷地内に「不滅の墳墓」を含む飛行場からの光だ。いくつものサーチライトが並ぶ中、プロペラ機の進行方向右手となる画面中央には、唯一輪郭の明確な半球体が描かれる。これこそ先の図1と同様の納骨塔である。この飛行場を兼ねる「不滅の墳墓」が配置されるべきは、各道府県の主

図1 平坦地方に設立さるべき不滅の墳墓

図2 大都市における不滅の墳墓(夜間飛行場)

図3 預骨堂を廻る儀式

図4 海辺,山辺における不滅の墳墓

要都市である。その前提となるのは、新時代の国防観念、すなわち、欧州大戦以降に非常な発達を遂げた航空機事情を鑑み、将来の空襲を予測してのことである。警戒すべきは昼間よりも夜間、特に暗夜の空襲だが、日本の飛行場事情を鑑みると、世界列国と比して桁違いに少ないのが現実であった。そこで一道三府四十三県それぞれに夜間離発着が可能な飛行場（兼ねる「不滅の墳墓」）を配置することで、全国主要都市を結ぶ夜間航空路が成立し、夜間航空標識はもちろん、暗夜の空襲に対しても整備がなされることになる。

図3で描かれるのは、先述した「五大特徴」の第四点、「宗教会館」内の「預骨堂」前で執行される儀式の様子である。廻る僧侶たちの法衣の描き分けは、複数の宗派が居並ぶことを意味しているよう。

図4は、「上」が海辺に、「下」が山辺に建立されるべき「不滅の墳墓」である。図1と同様に半球形に「共存」が書かれている点は共通している。「上」が示すのは、先述した「三種相」でも特記された、夜間灯台も兼ねる海辺の「不滅の墳墓」である。海辺では生業が漁撈であり、それは子孫にも継承される。子孫たちの夜間の漁船操縦を守護する灯台を支える「墳墓即灯台」として設計されているのだ。「上」は鳥たちも家路を急ぐ夕暮れだろうか、まさにこれから灯台が稼働する直前を描いているかと思われる。

『不滅の墳墓』の巻頭を飾るこれらの絵画は、雲外の提唱に「共鳴」した伊藤彦造<sup>(5)</sup>によって「昭和六年元旦より約旬日に亘る専心考究の揮毫に成るもの」（凡例）だという。雲外からの依頼は、当時、売れっ子の挿絵画家であった彦造にとって、ちょうど時宜に合ったものだったと推察される<sup>(6)</sup>。それというのも、昭和四年から六年にかけて、彦造は自ら企画した新聞広告「教育美談」を断続的に発表し、後に彼の代名詞ともなる「憂国の絵師」と署名し愛国精神を主唱していた。また昭和五年から自ら命名する「思想的絵画」なる愛国的題材の肉筆歴史画に専念

し、さらに昭和七年には自らの鮮血で「神武天皇御東征の図」を制作し、これを陸軍大臣、荒木貞夫大将へ贈ったことを契機に荒木と親交を深め、ついに昭和八年には「大日本彩管報告党」を結成（後に「大日本彩管報告会」と改称）した。以上の彦造の経歴を鑑みれば、「共鳴」（凡例）も単なる修辭ではなく、この時期まさに愛国的行動を顕わにしつつあった彦造の「憂国」の情との「共鳴」だったと思われる。

### むすびにかえて

以上、検討してきたように、雲外の構想する「永久有縁不滅の墳墓」は、『不滅の墳墓』に先行する姉妹編『思想悪化の因』『斯君斯民』を含めた三部作として構想されたものであった。同時代的には「思想善導」の流れに乗るものである。抽象的理念よりも具体的事実を重視する雲外は、批難されるべき「悪い方の社会環境」にしても、模範とすべき「光明の方面」についても、主に新聞記事から蒐集した「事実資料」に基づき論じている。「善」「悪」両方ある「社会環境」を踏まえ、より『善』へと善導教化すべく構想されたのが「不滅の墳墓」なのである。

政府による「思想善導」策については、一九三〇年代にはスポーツに対する政策的関与が思想善導策として展開されたとの指摘があり〔加賀二〇〇一〕、また近代史における「思想善導」の前史を含めた展開についての緻密な整理〔荻野 二〇〇七〕がなされている。これらを踏まえると、雲外の構想は官に対する民の側からする「思想善導」策の一例として、きわめて興味深いものと思われる。もちろんこれを官への迎合とみて問題を矮小化してしまうのではなく、官民を問わず模索された〈公〉への試みの一環として考える必要があるだろう。私見によれば、雲外の〈公〉には生者のみならず死者をも包摂する点に、独創性がある。それがあまりに強烈だったために、雲外による生者へ対する構想が見逃され



ていたのではないだろうか。

これまで『不滅の墳墓』に言及した者たち〔森 一九九三〕〔橋爪 二〇〇二・二〇〇四・二〇〇八〕〔土居 二〇〇六・二〇〇七〕は、『不滅の墳墓』のみで雲外の構想を論じていたために、同時代的に荒唐が進む墳墓への悲嘆を契機として「不滅の墳墓」を構想したと判断してきた。それは間違いではないのだが、ごく一面であるといわざるをえない。

何より先ず『不滅の墳墓』は、より効率的に「思想善導」を現実化するための、具体的施策として読まれなければならない。ここで『不滅の墳墓』という題目に誘引されてしまうと、死者の扱いがどうなされるか、そのことのみへと関心を向けてしまう視野狭窄に陥ることになる。その視野には、死者が「無差別平等」に合葬されることしか映じないだろう。しかし雲外は、死者のみならず生者をも対象としている。その点、たとえば図2が示す飛行場など、施設の物理的側面に徹底的に関心を向けた橋爪こそが、図1に描かれた気球から、そこへ備えられたスピーカーを読み取り、雲外が生者へどのように働きかけようと構想したのか、気付くことができたのだ〔橋爪 二〇〇二・二〇〇四〕。さらには小稿で確認したように、『不滅の墳墓』巻頭を飾る口絵を担当する挿絵画家として、当時「憂国の絵師」として自己主張しつつあった伊藤彦造は、まさに「思想善導」に適役だったといえるだろう。

ところで『不滅の墳墓』の口絵には、彦造の筆による絵画のほかに、写真二枚と図面四枚が残っている。最後にこれらを瞥見し、そこから導ける今後の課題を指摘することで、むすびにかえたい。

口絵のうち写真二枚は一頁に収められ、上に「石川県珠洲郡三崎村大屋にある不滅の墳墓」の写真が、下に「新潟県糸魚川押上にある不滅の墳墓」の写真が配されている。雲外はこれらを「既に実在する不滅の墳墓」と呼ぶ。現在の学術用語としては「総墓」すなわち「複数の家族あるいは血縁関係にない人々が一つの墳墓あるいは納骨堂を共有している合葬墓

の形態」のうち「村落で一つの墳墓（納骨堂）を共有する形態」である。他の口絵と同様に添え書きされた参照頁によれば、雲外がこれらの存在を知ったのは、脱稿直前だったようである。雲外が関係者に書簡で問い合わせたところ、関係資料の提供を受け、それに基づいて本文を執筆している。ここからは、雲外が「事実資料」として新聞記事を絶対視していたわけではないことがうかがえよう。何をもって「事実」とするのか。いかにして新聞記事は「資料」になるのか。思えば、雲外と同時代である昭和初期、主に新聞記事を資料として、われわれの来し方を問い、行く末に思いを巡らした著作があった。柳田國男『明治大正史世相篇』である。より精確に述べれば事態は逆である。柳田の『世相篇』が、日本民俗学の内外を問わず、後世においても参照され続けてきた。この事実こそが、改めて『世相篇』の同時代を顧みる必要性を要請するのである。その意味でこの小稿は、昭和初期の掃苔道・靈園行政・柳田民俗学を比較検討した作業〔土居 二〇〇六〕あるいは柳田民俗学の陰画として同時代的関心のネットワークを照らし出す作業〔土居 二〇一〇〕の延長上にある。私見では、墓制についての批評と研究とが徐々にその区別を明瞭にする最初期に当たる時代であり、今後も、様々な立場からなされる墓制をめぐる言説と実践の検証作業を積み重ねる必要がある。

口絵のうち図面四枚は、「創案者」としての雲外とともに、それぞれに「設計者」が名を連ねている。「不滅の墳墓平面図（航空機昼夜間着発場を兼ねるもの）」「夜間航空機着発場／電気照明設備設計図」「不滅の墳墓の納骨塔略図」「宗教会館建築設計理想図」と題されたそれぞれの参照頁によれば、これらの図面は、雲外の「知人」により「特志設計」されたものであり、この「知人」らは「工学士」「土木技師」「建築家」といった近代に成立した職能を肩書きとしている。まさに「都市計画の思考」と同類の工学的思考〔土居 二〇〇七〕である。そのような肩書きを持たない雲外もまた、たとえば工学的思考を前提とすつも

別の文脈における近代性を体現する機関であった『掃苔』同人（土居二〇一〇）のように、様々な統計資料や印刷メディアを駆使して活動している点で、全く同類である。その点で注目すべきは、雲外が三部作を通して問題視していた「ヨロシクヤラウと云う心」である。これは習慣や歴史の中に積み重ねられた、簡単に矯正することのできない根強いものとされる。これを原因とする具体例として「選挙権売買」などの「選挙違反行為」が挙げられる。このように説明される「ヨロシクヤラウと云う心」に関連して、民俗学に関心ある立場であれば、やはり柳田における選挙への関心を連想するであろう。具体的作業としては、室井康成によって別扱された柳田国男における「民俗」（室井 二〇一〇）との比較考察が必須となるだろう。

どうやら柳田国男に誘引されているようである。それだけ柳田が巨大な磁場だといえるべきか、それとも柳田くらいしか参照軸がないことが問題であるのか。前者の場合、私一人の力では、いかんともしたい。後者の場合、柳田以外の参照軸を確保し、自分なりに研究領域のマイマップ作成を重ねるしかないだろう。私自身はようやくごく一部の素描くらいはできるようになった（土居 二〇一〇）かと思うが、もちろん油断はできない。さっそく小稿も、マイマップに描きこむ必要があるだろう。

【付記】 投稿後、阿部純「不滅」の記憶はいかにして可能か―戦前日本に於ける共同墓の構想―（『東京大学情報学環紀要 情報学研究』七九、二〇一〇年一〇月）を読む機会を得た。雲外の三部作を考察の対象とするなど小稿と重なる点が多く、参照すべきところではあるが、残念ながら小稿の考察に組み込むことができなかつた。他日に期したい。

註

(1) 栗原文蔵「大野雲外論」（加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第10巻 縄文時代研究史）雄山閣、一九八四年、四七―五三頁）は、大野が画塾で学んだことについて言及した際に「晩年の『不滅の墳墓』（一九三三年）の設計見取図なども、その延長上で考えて良いものであろう」（同、四七頁）と述べている。つまり『不滅の墳墓』の著者を、大野雲外（延太郎）と同一人物とみなしている。興味深い見解ではあるが、細野雲外＝大野延太郎（一八六三―一九三八）とする論拠が不明であり、おそらくは「雲外」が共通することによる勘違いと思われる。そもそも本稿で取り上げる『不滅の墳墓』三部作において、執筆者が大野延太郎であることをうかがわせる記述は確認できない。

(2) 『葬儀の歴史』の初版（芳賀 一九七〇）では『不滅の墳墓』について言及がない。翌年に刊行された「増補改訂」版では、初版末尾から書き継ぐように小見出し「現代の墳墓研究の好著」が添えられ、「最後に、最近読んだ」（芳賀 一九七二―二七三）と書き始められ『不滅の墳墓』が言及される。さらに（増訂版）（芳賀 一九九一）では、小見出し「火葬場と近代化」と「増補 近・現代における告別式と葬祭の変化」章が書き継がれている。なお本文で述べるように、芳賀は『不滅の墳墓』に言及するに際し、小見出しこそ「現代の墳墓研究の好著」としているものの、その「好著」とする理由は『葬儀の歴史』を読んでも判明しない。

(3) 久野収・鶴見俊輔「現代日本の思想」（岩波書店〈岩波新書〉、一九五六年）は、その第二章「日本の唯物論・日本共産党の思想」の冒頭で「思想悪化の因」に言及している。すなわち「昭和のはじめのころ、日本共産党がマス・コミュニケーションの上で、どういう役割をふりあてられていたかをしめす手がかりの一つ」（同書、三〇頁）として、「思想悪化の因」が新聞記事を引用し、風紀の乱れや若者の礼儀の欠如、暴利を貪る商人等とともに、「天皇の病気にもかかわらず金持貴族がダンス会などもよおして不謹慎であることなどの諸例にならぶ項目として、左傾、赤化をあげている。このような分類の仕方、编者個人のものというよりも、当時の日本の新聞に共通する考え方であった。このようなマス・コミュニケーション上の分類は、当時の大衆意識の上での分類に対応する」（同書、三〇頁）と指摘している。続けて同書は「私の知人の七十歳のおばあさん」の言として、「ダンスをよくする若い人」について「まあ昔のことばで言えばアカだね」との用法を紹介している。つまり同書は、昭和初期における「アカ」なる語の含意を探る上で、ダンスと「赤化」が列挙されていた「思想悪化の因」を参照したことになる。しかし同書が指摘する「ダンス会」は、雲外の文脈ではあくまで「天皇の病気にもかかわらず」に催したことが「不謹慎」として問題視されているのであり、ダンス自体を批判してい

るわけではないと理解する方が、妥当であろう。

(4) これまで『不滅の墳墓』について、もっとも繰り返し言及してきたのは、橋爪紳也であろう。ただし現在、確認できた論考は小稿で参照した三点（橋爪二〇〇二・二〇〇四・二〇〇八）のみである。たとえば（橋爪二〇〇二）は、もともとなつた連載を収録した橋爪『あつたかもしれない日本—幻の都市建築史』（紀伊國屋書店、二〇〇五年）では、「橋爪二〇〇二」の論考で『不滅の墳墓』に言及した部分が削除されている。この「橋爪二〇〇二」と、別の連載を収録した部分（橋爪二〇〇四・二〇〇七）とを対照すると、ほとんど同内容であることが確認できる。単著だけでも優に十冊を超える橋爪においては、ほかにも類似の状況があるかと思われる。おそらくはまだ複数の論考で言及していると思われるが、残念ながら橋爪の著作の全貌を把握できていない。

(5) 伊藤彦造については、『伊藤彦造画集』（講談社、一九七四年）、『伊藤彦造名画集—愛国画家の入魂世界—』（講談社、一九八五年）、『新装増補版 伊藤彦造イラストレーション』（河出書房新社、二〇〇六年）それぞれ収録作品および収録諸論考を参照した。本文における彦造に関する記述は、以上の文献に基づく。なお彦造の経歴については、渡辺圭二『伊藤彦造小伝』（『伊藤彦造画集』、無署名）『伊藤彦造略歴』（『伊藤彦造名画集』）、渡辺圭二『伊藤彦造の歩んだ道』・同『伊藤彦造略年譜』（『新装増補版 伊藤彦造イラストレーション』）があるが、いずれも昭和六年（つまり『不滅の墳墓』口絵を彦造が描いた年）は、彦造が一時出版界から身を退いた時期として一致している。

(6) 前掲註5で参照した画集収録作品および収録諸論考において、雲外『不滅の墳墓』についての言及は皆無である。たしかに「彦造の個性が最も輝いたのは、少年雑誌を舞台とした時であった。／一九二〇年代と五〇年代をピークに、彦造描く美剣士は少年達を熱狂させた」（中村圭子『伊藤彦造のイラストレーション』）『新装増補版 伊藤彦造イラストレーション』河出書房新社、二〇〇六年）彦造の絵画として眺めると、『不滅の墳墓』口絵はかなり異色というべきだろう。なお『不滅の墳墓』口絵につき、中村圭子氏（弥生美術館）および中村氏経由で伊藤布三子氏（彦造次女）へ照会願ったところ、両氏ともにこの口絵については初見であった。後日、布三子氏から頂戴した私信によれば、昭和五・六年当時の彦造は多くの弟子を抱えており、たとえば図2などはかなり弟子の手が入っているのではないかとはいえ図1の画面中央で振り向いている女性の顔などは明らかに彦造の筆であろう、とのことである。

(7) 総墓については森謙二『総墓』（新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小辞典 死と葬送』吉川弘文館、二〇〇五年、一八六—一七頁）を参照。また森『総墓制』（森一九九三・一一四—一三三）、同『総墓の諸形態と祖先祭祀』（『国立歴史民俗博物館研究報告』四一、一九九二年）、孝本頁『共同納骨碑の造立と先祖祭祀—新潟県糸

魚川市押上「百霊廟」の事例—（同前。のち孝本『現代日本における先祖祭祀』御茶の水書房、二〇〇一年。へ改題して所収）を参照。

【謝辞】

『不滅の墳墓』口絵に関連し、昭和五・六年当時の伊藤彦造について、伊藤布三子氏および中村圭子氏よりご教示賜りました。また切通理作氏からは、そもそもこの口絵を検討することにつき、貴重な示唆を頂戴しました。この場を借りて深く感謝の意を表します。

文献

- 土居浩「一九三〇年代、墓をめぐる実践が逆照射する仏教概念」『宗教と社会』十一、二〇〇五年、一三四—一七頁。
- 土居浩「墓地の無縁化」をめぐる構想力—掃苔道・霊園行政・柳田民俗学の場合—」『比較日本文化研究』十、二〇〇六年、七六—一八八頁。
- 土居浩「近代人のモノ感覚—墓をめぐる人々の場合—」『モノ学・感覚価値研究』一、二〇〇七年、七四—一八頁。
- 土居浩「仏教民俗学と近代仏教研究のあいだ—五来重に焦点を当てて—」『季刊日本思想史』七五、二〇〇九年、九三—一二頁。
- 土居浩「墓ばかり調べている人」たちのネットワーク—史蹟名勝天然記念物保存協会における「掃苔」同人の邂逅を中心に—（『西海賢二ほか「墓制・墓標研究の再構築—歴史・考古・民俗学の現場から—」岩田書院、二〇一〇年）。
- 芳賀登『葬儀の歴史』雄山閣一九七〇年。同増補改訂、一九七一年。同（増訂版）、一九九一年。
- 橋爪紳也「できそこなつた日本（最終回）慰霊のデザイン」『i s』八八号、ポータル文化研究所、二〇〇二年九月、六六—一六九頁。
- 橋爪紳也『飛行機と想像力』青土社、二〇〇四年。
- 橋爪紳也「死者たちのユートピア」（同『増補』明治の迷宮都市）ちくま学芸文庫、二〇〇八年、四三—七二頁。初出は一九八八年）。
- 細野雲外「思想悪化の因」巖松堂書店、一九三〇年。
- 細野雲外『斯君斯民』巖松堂書店、一九三二年。
- 細野雲外『権金即魔』雲外書房、一九三三年。
- 加賀秀雄「一九三〇年前後のわが国におけるスポーツ動向とその歴史的性格について」『名古屋文理大学紀要』創刊号、二〇〇一年、一二九—一三七頁。
- 室井康成「柳田国男の民俗学構想」森話社、二〇一〇年。
- 森謙二「墓と葬送の社会史」講談社現代新書、一九九三年。

荻野富士夫『文部省の治安機能―「思想統制」から「教学錬成」へ』、平成一五―一八年度科学研究費補助金(基盤研究(C))(2)(15520393)、<http://hdl.handle.net/10252/917>、二〇〇七年。

(ものづくり大学技能工芸学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇一〇年九月二七日受付、二〇一一年二月二二日審査終了)

---

## Environmental Design for Proper Guidance of Thought : Reading Ungai Hosono's *Fumetsu no Funbo*

DOI Hiroshi

Reading Ungai Hosono's *Fumetsu no Funbo* (*The Tomb of Immortality*; 1932) from the perspective of body and character, you realize that despite the book's title, it concerns the bodies and characters of the living rather than the dead. It has been pointed out before that Hosono's peculiar idea of "tombs of immortality" where everyone from each region would be buried coincided with a time when people were increasingly lamenting the dilapidated state of graves. As the large number of newspaper articles quoted show, *The Tomb of Immortality* takes issue with the neglect of graves, but it was published along with *Shiso Akka no In* (*The Causes of Deteriorating Social Ideology*; 1930) and *Shikun Shimin* (*The Emperor and the Common People*; 1931) as one of a series of three works concerned with the subject of "proper ideological guidance", which was a prevailing doctrine of that period in Japan.

In the first work, *The Causes of Deteriorating Social Ideology*, Hosono sought to demonstrate the degree to which ideology had declined, not only among certain students and youth groups, but among the whole populace. His arguments, based on masses of "factual materials" gathered from newspaper articles, reflect a stance that he also adopted for the subsequent two works, which Hosono himself positioned as the first and second part of *The Causes of Ameliorating Social Ideology*. In the second work, *The Emperor and the Common People*, Hosono again marshalled various "factual materials" regarding the direction ("towards the light") that should be taken for proper guidance and education of the people, and explains what could be done to effectively "preach" this doctrine. The purpose of the third work, *The Tomb of Immortality*, is to put forward concrete policies for guiding the populace towards proper ideology and education in a society in which both good and evil exist. *The Tomb of Immortality* concept was designed as a stage for more effective preaching of the doctrine of proper guidance of ideology, and in this sense, is concerned more with the living than with the dead.

An illustration and diagram decorate the opening pages of *The Tomb of Immortality* as concrete images of the kind of "tomb of immortality" proposed by Hosono. The illustration is the work of an illustrator who was in great demand at that time, Hikoza Ito. Considering that he pitched himself as "the patriot artist", Ito was perhaps the ideal choice.

Keywords: communal graveyard, early Showa period, environmental design, proper thought guidance, Hikoza Ito

---